

第 33 回麻布環境科学研究会 一般演題 6

学生と地域市民と NPO が協働で実施した 自然体験活動の実践

佐藤 彰太¹, 小島 慎伍², 片山 有輝², 村山 史世³

¹麻布大学 地域環境研究室 3 年, ²麻布大学 地域環境研究室 4 年,
³麻布大学 地域環境研究室 講師

1. はじめに

青根 DE アオーネ遊びとまなびの会が 7 月 14 日に実施した自然体験活動「青根・道志川 川遊び・川流れ体験 水ノ郷めぐり青根」について報告する。

青根 DE アオーネ遊びと学びの会は、麻布大学の学生を中心として青根で環境まちづくりを行っているあざおね社中と青根のお神輿サークル「青根山王会」で、道志川をフィールドとした自然体験活動を実施するために結成された。

本事業は道志川でライフジャケットをつけて自然体験活動を実施するため、全国の川での自然体験活動の支援を行っている NPO 法人川に学ぶ体験活動協議会 (RAC) と連携をした。

本年度は RAC の実施する「川の流れ体験全国キャンペーン」のメインイベントでもあるため、RAC は共催者として名を連ねた。

このように、学生・地域市民・NPO の三者が協働で実施しているのが本事業の特色である。

また、本事業は、平成 25 年度相模原市津久井地区地域活性化事業交付金から資金を得た。

以下、事業の目的、事前準備、事業内容、実施結果、成果と課題について報告する。

2. 事業の目的

青根は過疎・少子高齢化の準限界集落であり、地域の活性化および都市部との連携が常に課題となっている。課題に対する具体的な方策は経済的効果を期待した観光振興が中心である。

あざおね社中は、生物多様性の調査や環境学習、まちづくりを通して、青根の自然の持つ価値を再確認してきた。

津久井地域の水源は、生態系サービスとして都市部の相模原市民のみならず神奈川県民の全体の生命を支えている。

津久井の水源林や道志川といった自然の恵みを都市部の人と津久井地域の人との交流を通して、体験的に多くの人に知ってもらうとともに、青根に親しみをもってもらうことが本事業の目的である。参加者には青根への再訪問を期待している。

3. 事前準備

本事業では、あざおね社中側の全体の準備時間だけで 100 時間となる。これにはポスターの製作や会議資料の作成など個別の準備時間は含まれない。事前準備には、地域活性化交付金申請のための津久井まちづくりセンターでのプレゼンテーション、渋谷で開催された NHKeco パークへの出展、橋本開催されたさがみはら環境まつり 2013 への出展のような広報活動、プログラムの作成と現地でのリハーサル (6 月 16 日, 6 月 23 日, 7 月 7 日) および、それぞれの打ち合わせも含まれる。

4. 事業内容

当日のプログラムは以下のようなものである。

- ① 橋本駅からバスで移動する際に事業および青根地域の説明

- ② ライフジャケットの着用および安全管理講習
- ③ 此の間沢溪流園キャンプ場で水生生物（指標生物）調査
- ④ 青根の地元食材で昼食
- ⑤ 道志川での川遊び・川の流れ体験
- ⑥ 振り返り
- ⑦ 解散

5. 実施結果

7月14日にプログラムどおりに事業は実施された。参加者数は26組66人（内訳：小学生27人，高校生4人，未就学児童10人，大人25人）であり，スタッフはあざおね社中20人，青根山王会10人，RAC15人の計45人であった。

事故もなく，安全に事業は実施された。

6. 成果と課題

参加者の内訳は都市部から53人，津久井地域から8人も参加してくれており，都市部と津久井地域との人的交流は達成された。とくにNHKecoパークで本事業を知った世田谷在住の親子2組が参加してくれたことは特筆したい。

参加者アンケートによると，プログラムへの満足度も高く，川で安全に学ぶ方法も学んでくれたようである。他方，プログラム進行上の時間管理や食事の提供については課題があったようである。

準備に携わった学生達は，今回の「実践コミュニティ」へ参画したことで，多くの学びを得た。

他方，青根山王会との協働・役割分担には課題があった。